

自然を語る会

2016年7月16日（土）10：30～12：30

於：日比谷公園 緑と水の市民カレッジ

参加者 9名（上遠、鈴木、浅井、岩渕、濱田、神保、飯泉、柳澤、井上）

担当 井上正太さん

対象著書： ポール・ブルックス著、上遠恵子訳『レイチェル・カーソン』

第9章 『われらをめぐる海』に取り組んで

第10章 名声

レイチェル・カーソン「海の三部作」はみなベストセラーだが、1951年出版時、86週にわたり（ちなみに1年は52週）『タイムズ』ベストセラーリスト入りし、幅広い読者と出版界から絶賛を得た作品『われらをめぐる海』が生み出された経緯や背景等を著者のポール・ブルックスが2章にわたり著述した。濃い内容の感動の物語を、今回担当された井上さんが、整理し、分かりやすく解説した。出席者はいつもより少なめだが、諸先輩より学び、全員が感想や意見を述べあうなど活発であった。

『われらをめぐる海』は、出版後65年とかなり昔の著作だが、鮮度や重要度は全く落ちず、増してさえいるのは驚くべきことだ。

科学技術万能かつ人間優先の当時の世相に何かと危機感を持ち、いのちを重んじ人間らしい暮らしを求める読者は、壮大な海の物語に癒されたのではないか。今日の世相（世界も我が国も）同じではないだろうか。この道はおかしいと。

今回取り上げたポール・ブルックス著『レイチェル・カーソン』第9及び10章は、『われらをめぐる海』制作のきっかけから、執筆、出版に至る愉快的実体験に裏付けられたさまざまな知的探求、生活を含む奮闘の末、大成功（名声）をかちとる物語。カーソンへの深い尊敬と壮大な海への畏敬の念が増す。

終わりは、井上さんも取り上げたカーソンの言葉でしめたい。

「人間がほとんど出てこないような本が、広く読まれたということにも、かなり驚いた。私も読者からたくさんの手紙をもらった。彼らの言葉を借りれば、何百万年、何十億年の移りかわりを瞑想するなかで、そしてまた、私たちが全面的に地球に依存しているにもかかわらず、この同じ大地も海も私たちがまったく必要としていないということを実感するなかで、彼らは緊張感からの解放と爽快さを、見出した」

（文責：岩渕徹郎）